

招待席

大塚甲山

おおつかこうざん 詩人、俳人、歌人。1880（明治13）年～1911（明治44）年
青森県生まれ。1902（明治35）年、上京、河東碧梧桐、与謝野鉄幹などの知遇
を得る。その後、森鷗外、上田敏らと交流。1904（明治37）年、社会主義協会
に入り、坪内逍遙の紹介で、反戦詩を「新小説」に発表したほか、多数の詩が、「新
小説」、「明星」、「平民新聞」などに掲載された。その後、故郷に戻り、「東奥日報」
の俳壇・歌壇の選者を務めた。肺結核で、31歳の短い生涯を閉じた。掲載作のうち、「冬
の蝶」は、「文庫」明治34年1月号、「農夫」は、「読売新聞」明治37年10月16日付で、
初出。「明治文学全集83 明治社会主義文学集（二）」（1965年7月、筑摩書房刊）
に拠り、収録。

冬の蝶・農夫

冬の蝶

灰色深き冬空の

見るく雨のこぼれきて

膚^{はだへ}に告ぐる寒き日を

覚束なくも飛ぶ蝶よ。

春は菫の花に泣き

夏は小百合の香に酔ひて

闌なりしその夢は

萩吹く風にさめたるか。

つらく悲く淋くて
われも泣きたきこの雨よ
なが脆くして美しき
羽をうたするになど耐へん。

夕くれさればこの雨は
やがて雪ともかはるべし
さらば凍えんが命、
それとも知らで飛ぶことか。

長らふまゝに吹きつゝのる
嵐烈しき世と知らば
紅葉がもと下にな汝がから骸を
埋めたらんに口惜しく。

われもこの世は侘び果てゝ
暫しは歌にかくるれど
まださめやらぬ胸の血ぞ
来ても縋れや冬の蝶。



石の上に白き胡蝶の凍えたり。

農 夫

帰牛きぎうの群にまじりつゝ
帰る農夫の簞への上に、
胡桃の葉散る村外れ、

秋の葉黄ばむ森の上。
牛と無心に野辺に出で、
牛と悠々家を指す、
あゝ生涯は平の、
村の径の如くなり。
美なる自然の懐に、
かき抱かるゝ幼子と、
言はゞや言はん、聞けうたふ、
罪なき恋の一節は、
彼等の父も其父も、
ここに唱へし調なり。

Otsuka Kosan

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Mar 04, 2009